

2012年 第6回 国際アイリス・マードック学会報告

大槻美春

2012年9月14日15日、ロンドン、キングストン大学にてアイリス・マードック国際学会が開催された。今学会のテーマは「Baggy Monsters—マードック後期作品」、厚みを増し長編化していったマードックの後期作品が中心テーマとなった。「ブヨブヨの怪物」を意味するこの Baggy Monsters はヘンリー・ジェイムズの言葉の引用で、マードックが夫ジョン・ベイリー氏との日常会話でよく使った言葉として知られる。

両日に先立つ13日夕方、キングストン図書館でのワインレセプションとアン・ロウ氏の講演で、学会はスタートした。講演は、マードックが友人の画家ハリー・ヴァインベルガー氏にあてた300通以上の手紙が寄贈されたのを記念し催された。テツィアーノをはじめとする16世紀イタリア絵画から現代絵画がスクリーンに映し出され、ロウ氏は絵画に言及した二人の手紙のやり取りの内容と初期の作品描写への影響などについて説明した。参加人数が限られたのが惜しまれる素晴らし

い講演だった。学会開催中、手紙の一部が、キングストン大学のアイリス・マードック文書館で公開展示されていた。

2日間の両日、4人の講師が講演した。初日午前、チャールズ・ロック氏が、哲学者であり小説家でもある「ジョン・クーパー・ポウイスとマードック後期作品」について講演した。ドフトエスキー、フロイドと密接な関係にあるモダニストとしてのポウイスのマードックへの影響、特にマードックの愛の幻想と、プラトン、フロイト、カナッティ、クノー、エンプソンの愛との関係性について、解説した。午後は、アン・チザム氏が、マードックと生涯の友「フィリッパ・フットとの友情」の演題で講演した。チザム氏は、バイセクシャルなマードックの愛と友情について、キングストン大学マードック文書館の手紙を引用し話した。2日目午前は、『アイリス・マードック、ジェンダーと哲学』（2011）の著者サビナ・レヴィボンド氏が、「80年代マードックのリアリズム」に



＜シーフォース・プレイスのアパート＞
マードックは、1942-45年にフィリッパ・フットとここに住み、財務省に勤務。フィリッパ亡き後、フィリッパの妹さんが住んでいたが、現在は誰も住んでいない。近隣の建物が壊され、このビルの存続が危ぶまれる。



マードックは、彫刻の施された建物の立ち並ぶ道を通勤に好んだ。

ついて講演し、質問と討論が「リアリズム」という言葉に集中した。2日目午後は、『名誉ある敗北』2001年ヴィンティジ版に紹介文を寄せているフィリップ・ヘンシャー氏が「マードックと1980年代作家たち」について講演した。ヘンシャーは、マードックの1980年代の小説が三人称の心理学的小説として描かれている意味について、またマードックの「魔術師の登場人物」について、そして労働者階級観とマイノリティの描き方について、自身の小説も含め多数の現代作家と比較し話した。14の分科会・セミナーでの研究発表は、哲学関係が目立つものの、文学はもちろん心理学、教育、芸術と内容は多彩だった。動物と心理の描写をテーマとした発表が話題となっていたが、なかにはマードック文学の「エロス・スケール」をキーワードにインスタレーションの造形として作品展示し、その映像を披露した若き芸術家の発表もあった。いずれの発表に対しても、司会、フロアーの質問と意見、討論は建設的で、マードック

研究を歓迎する雰囲気になり溢れていた。

恒例のウォーキングツアーは、『アイリス・マードックのロンドン』(2008) 第5章「ホワイトホール」の場所から選ばれた。16日、地下鉄ウエスト・ミンスター近くの前橋に集合し、セント・ジェイムズ・パークを通り、マードックが財務省へと通った道を散策した。バーバラ・フィリップ氏が案内し、シェリル・ボヴ氏が説明した。ウエスト・ミンスター大聖堂で自由解散のあと、数か所に分かれてのバブ・ランチとなった。アン・ロウ氏の講演、2日間の学会、そして16日のロンドン・ウォーキングツアーの4日間に、15か国からのべ300人以上の参加者があった。日本マードック学会からは、ポール・ハラ氏(発表、司会)、ウエンディ・中西氏(発表)など複数の会員の参加があり、会期中、世界各国の参加者との交流はもちろん、日本各地から参加した研究者との交流を深めた。

(会員)